

大きめの制服のなかに身を入れて高三の後を中一あ
るく 桜川冴子

作者は、キリスト教系の中高一貫の女子校に勤務して
いる。ユーモラスであたたかい作者のまなざしがこの歌
から感じられる。「大きめの制服」にはこれから始まる学
校生活への期待と不安が詰め込まれているのだ。「短歌現
代」二〇〇九年六月号掲載。

学校にはあまたのフック取りあへず今日を吊るして
ゆらゆらとする 梶原さい子

千人の生徒がいれば千個のフック。日本全国数え上げ
たら夥しい数のフック。「今日を吊るす」がこの歌の手柄。
今日という不安定な時間を取りあえず留めておくのが
「フック」なのだ。『あふむけ』（二〇〇九）所収。

人けなき体育館に籠球の底の抜けたる網さがりある
志垣澄幸

底が抜けている網を作者は虚ろな気持ちで見上げてい
る、まるで底の抜けた網のように。生徒がいない学校の
体育館ほど寂しいものはない。生徒たちがわいわいがや
がやバスケットボールに興じている場所こそ学校の体育
館なのである。『星霜』（一九八七）所収。

学校のぐるりにさくら咲きみちて鬱々とせるものを
やしなふ 久我田鶴子

小林秀雄は、文部省が植木屋と結託して学校に桜（ソ
メイヨシノ）を植えたと言っていたが、学校といえは桜
である。桜が咲きみちている学校のぐるりとは裏腹に

短歌の現在

学校・生徒の歌15首を読む

本田一弘

「鬱々と」したものを抱え込んだ生徒たちがその中にた
くさんいる。結句の「やしなふ」が巧い。そう、桜が生
徒を養っているのだ。『ものがたりせよ』（一九九七）所収。

満ちむ潮に耐ふる崖夏服の少年たちの試験の午前
上村典子

シャンプーの香をほのぼのとたてながら微分積分分
子は解きおり 俵万智

玉砕だあ 叫ぶ声ありはつなつの考査終はりしざわ
めきのなか 大松達知

学校に試験がなければ最高だが、現実とはいかない。
悲しき哉、学校とはそういうところだ。上村作は、
試験の、あの独特の緊張感を「満ちむ潮に耐ふる崖」と
いう感覚的な比喻で捉える。「潮」や「夏服」といった語
があるのだ。はじめとした嫌な感じはない。試験中の教
室の爽やかな空気をこの歌から感じる。俵作からは、試
験に真剣に取り組む生徒の姿と、試験の監督をしながら
生徒たちをやさしく見守り、励ます教員の気持ちが伝わっ
てくる。シャンプーの香と微分積分の取り合わせが面白
い。大松作は、試験終了の瞬間を歌っている。「玉砕だ
あ」という言葉が、戦争で兵士が唱えた悲劇的な意味と
は遠く離れて屈託ない。試験が終わった解放感と軽い絶
望感が手に取るように分かる。上村作は『草上のカヌー』
（一九九三）、俵作は『サラダ記念日』（一九八七）、大松
作は『アスタリスク』（二〇〇九）所収。

もう二度とこんなに多くのダンボールを切ることは